

視覚による対象把握のみが問題となる。

動作の特徴

知覚される視野は、狭い。(本来の視野の中心部) その視野の中に、対象を点的に把握する。このため、複数として意識されるような物体や風景・場面そのものは、対象とすることができない。視点は固定されている。

心的態度

心的な緊張感がある。対象に注意を注ぎ、積極的にかかわっていこうとする姿勢がみられる。対象についての価値判断などの心の働きは、認められない。

「ながめる」

視覚による対象把握と共に、その際の心の動きが問題となる。

動作の特徴

知覚される視野は「みつめる」より広い。それだけでなく、視点の移動が可能のため、視野をかなり拡大することができる。このため、一度に視野の内におさめることができないような広がりをもつものをも対象とする。その把握のしかたは、面的把握で、広がりをもったものから特定の部分を取り出すことなく、そのまま把握

する。

心的態度

対象との間に心理的距離をおこうとする客観視の態度が、根本にある。このため、鑑賞その他の意味あいが出てくる。また、人間を対象とする時には、その客観性から、人間を物体として扱うニュアンスが生じ、冷やかな感じを与える場合がある。

4. おわりに

この分析では、終始「みつめる」と「ながめる」の二語だけを扱った。が、他の関連語との分析を試みることは、新しい観点からの分析を可能にするから、その意味で、必要であろう。あわせて分析しなければならない動詞は、「みつめる」と「にらむ」、「ながめる」と「みやる」である。

最後に、分析を進めて行くにあたって、的確なアドバイスをし、寛大な目で見守ってくださった、先生とゼミの方々にお礼を申し上げます。

言語経歴：1959年2月東京都豊島区生。0歳～3歳豊島区。3歳～4歳板橋区。4歳～ 埼玉県入間郡鶴ヶ島町。

さめる・ひえる

柴田 稔

1. はじめに

「さめる」「ひえる」は国立国語研究所1964の「2.517熱」に分類されているが「2.5161火」の項の動詞や「2.5160凍り・さびなど」の「こおる」などとも関連があると思われる。これらの動詞が意味するのは「熱(温度)変化とともに起こる、ものの変化」「熱(温度)変化そのもの」など、自然現象の中の変化であるが、日常生活の中で一般に広く「ものの温度変化」を表すのは「さめる(さます)」「ひえる(ひやす)」「あたたまる(あたためる)」であろう。ここでは、温度の下降を表す「さめる・ひえる(さます・ひやす)」を分析し、意味的に関連があると思われる語についても考えていきたい。

2. 分析

2. 1. さめる・ひえる

2. 1. 1. 主体

- (1) ご飯が さめる。
- (2) ご飯が ひえる。
- (3) 湯が さめる。
- (4) ビールが ひえる。
- (5) 熱せられたガスが さめる。
- (6) クーラーで 部屋の空気が ひえる。

「さめる」「ひえる」とも固体・液体・気体を問わず、主体とすることができる。「ひえる」にはさらに次のような用法もある。

- (7) 冬が近付くと 夜は ひえる。
- (8) 盆地は 夜になると ひえる。
- (9) 秋が ひえるにつれて……

〔「雪国」国研1972の用例より〕

「さめる」にはこのような用法はない。時間、季節などは、そのまま主体とは考えにくい、それぞれ夜

の、盆地の、秋の空気が主体と考えれば良いのかも知れない。(6)は

(10) クーラーで 部屋が ひえる。

とも言えるだろう。(9)は文学的表現とも考えられる。国立国語研究所1972によれば

「ひえる」は非人称的な用法のおおい動詞である。としている。

2. 1. 2. 変化前の温度

(11) *水が さめる。

(12) 水が ひえる。

(13) *冬 外にいと からだが さめる。

(14) 冬 外にいと からだが ひえる。

(15) 風呂あがりのからだが すっかり さめてしまった。

(16) 風呂あがりのからだが すっかり ひえてしまった。

(12)は「水」という、人間の体温以下のものの温度が下がること、(14)は体温が下がることを表す。(15)(16)は普段より上がった体温が下がることである。(1)(3)(5)の「ご飯」「湯」「ガス」も人間の体温以上の温度のものであると思われる。「さめる」は「人間の体温以上のものの温度が下がること」である。言い換えれば、アツイ(熱)・アタタカイと感じられるものの温度が下がることである。「ひえる」はこの点については制約がない。普通気温は人間の体温以下であるから、(7)~(9)のような時間・場所・季節(の空気)の温度が下がる場合に「さめる」が使われない理由はここにあるのかも知れない。

2. 1. 3. 変化後の温度

次に変化後の温度について考えてみよう。(15)(16)を比べると、(16)の方が温度(体温)が下がったように感じられる。

(1) ご飯が さめる。

(2) ご飯が ひえる。

この場合も同様に(2)の方が温度が低い感じがする。「ひえる」はツメタイ一つめたくなる、ということと、ほぼ同義であると思われる。

(4) ビールが ひえる。

(6) クーラーで 部屋の空気が ひえる。

これらの例もそれを示している。「ひえる」は「ものの温度が人間の体温以下(ツメタイと感じる温度)に下がること」である。

それに対し「さめる」には、次のような例がある。

(17) 風呂が さめる。

(18) お茶が 飲み頃に さめる。

(17)は普通風呂の湯がぬるく(体温前後の温度)になることを表すが、水(ツメタイ状態)になることも表し得る。(18)の飲み頃のお茶は人間の体温よりも高い温度だが、やけどをする程アツイ(熱)ものではない。このように「さめる」の変化後の温度には幅があり、明確には示し難い。ただ「さめる」が「アツイ(熱)状態でなくなること」「体温との差が少なくなること」を表わすとは言えるだろう。

今までの例は、日常生活の中で考えられる温度についてのもばかりだが、その場合人間は、自己の体温を中心として「さめる」「ひえる」を使い分けられていると考えられる。したがって変化前・後の温度にしても絶対的なものではなく、その場合場合の感覚に左右される相対的なものである。

日常生活を離れた事柄で「ひえる」が単にものの温度が下がることを表わす場合もある。

(19) 太陽が 年々 ひえていく。

2. 2. さます・ひやす

他動詞「さます」「ひやす」も「さめる」「ひえる」と大体同じ意味特徴をもっている。

(20) スープを さます。

(21) *水を さます。

(22) ビールを ひやす。

(23) *腹を さますと からだに悪い。

(24) 腹を ひやすと からだに悪い。

(25) 湯上がりのからだを さます。

(26) 湯上がりのからだを ひやす。

「さます」は「人間の体温以上の熱をもった、アツイ(熱)と感じられるものの温度を下げること」「ひやす」は「ものの温度を人間の体温以下、ツメタイと感じられる温度にまで下げること」である。

2. 3. すずむ

(25)(26)のように、人間が意図的に自分の体温を下げようとする行為には自動詞「すずむ」も使われる。

(27) 湯上がりに すずむ。

しかし、「すずむ」は意味領域がせまく、自分のからだ以外には使用できない。

2. 4. さめる：冷める・覚(醒)める・褪める

(28) 酔い(目・眠り・迷い)が さめる。

(29) カーテンの色が さめる。

「さめる」は温度変化のみならず、広く「状態の変化」を表わす。柴田編1976は、これらの例の一致した特徴として『非常態から常態への移行』をあげている。アツサ、酔い、眠り、迷い、色が付いた状態という「非常態」から、熱くない状態・シラフ等の「常態」に変化するのである。日常生活の中で、人間の体温よりも高い、アツイ状態は「非常態」として考えられるのである。

2. 5. 派生的用法

- (30) 愛情が さめる。
 (31) 愛情が ひえる。
 (32) いかりが さめる。
 (33) ?いかりが ひえる。
 「愛情」「いかり」なども、感覚的に熱をともなった

非常態で、そこから熱をもたない常態へ移行するのである。「愛情」などは常態以下になることも考えられる。

3. まとめ

- さめる…人間の体温以上のものの温度が下がること。
 アツイと感じられる状態でなくなること。
 (温度変化以外にも、非常態から常態への移行、として使われる。)
 ひえる…ものの温度が下がって、人間の体温以下
 (ツメタイと感じられる状態)になること。

言語経歴：1956年神奈川県大和市生。現在に至る。

さます・ひやす・うめる

平澤 洋 一

1. 冷却語彙の枠づけ

「さます」「ひやす」「うめる」は、いずれも多義語であるため、どの文脈レベルで冷却語彙として一つの類をなすかをまず明らかにすべきものとする。

「さます」

- ① 温度の高い対象から熱を取り除いて温くする。
 (1) 味噌汁を さます。
 (2) ゼリーを さます。
 ② 眠っている状態から起きている状態に変化させる。
 (3) 朝6時に 目を さます。
 ③ 酒気をおびた状態からそうでない状態に変化させる。
 (4) 酒の酔いを さます。
 ④ 迷っている状態から正常な状態に変化させる。
 (5) さすがの極道者も 母の言葉で 目を さました。
 ⑤ 感情・興などを高まった状態から鎮まった状態に変化させる。
 (6) 興を さます。

「ひやす」

- ① 温度の高い対象から熱を取り除いて冷たくする。
 (7) 部屋<の空気>を ひやす。
 ② 感情などの高ぶった状態から鎮まった状態に変化させる。

- (8) 頭を ひやして 考える。
 ③ 通常の心的状態から非常に驚いた状態に変化する。
 (9) 肝を ひやす。
 「うめる」
 ① 周囲より窪んで穴になったところに物を詰めてふさぐ。
 (10) 障子の穴を うめる。
 ② 土・雪などをかけて対象の一部ないし全部を見えなくする。
 (11) 庭石を 浅く うめる。
 ③ 物を混入して温度や濃度が目標の状態になるまで変化させる。
 (12) 風呂が 熱いので 水を うめる。
 ④ 場所・地域などを人や物で一杯の状態に変化させる。
 (13) 学生が 会場を うめつつある。
 ⑤ 損失や不足のある部分を補う。
 (14) 赤字を うめる。

上記用例(10)の意味での「うめる」は「ふさぐ」などと類義をなし、(11)の意味での「うめる」は「うずめる」などと一つの類をなす。

これと同様に、「さます、ひやす、うめる」は対象を冷却するという意味の枠でとらえた場合に一つの類(かりに冷却類とよぶ)をなす。この類は「あたため